

記念講演 2

トランジション実現のための影響の大きな高校・大学での学びを
理論的、実証的に示す

【講師】 溝上 慎一（学校法人桐蔭学園 理事長／桐蔭横浜大学 教授）



（スライド1）皆さま、こんにちは、溝上でございます。荒瀬先生のお話を受けて、今、特に資質・能力が文部科学省の大きな柱・テーマになっておりますが、それと探究、この2つから高大接続、トランジションを議論したいと思います。私は、学術的なベースでデータや理論を取りながらお話しをするようにしていますが、先ほど、荒瀬先生が最後に言った、共有知識や共通の基盤とは意味が違いますが、政府の文書、言葉は非常に大事ですので、できるだけ皆さんとチャンネルを合わせて、両面でいろいろなお話しをしたいと思います。荒瀬先生のお話を聞いていると、私は我流のようで、合わせているのも無理やりなところがありますが、荒瀬先生の話を受けて、私が考えているところをお話しする時間とさせていただきます。

（スライド2）今日は、河合塾の方も来られていますが、10月1日に10年トランジション調査の最終成果報告会がありまして、データから、高校・大学・社会と、どういうところがポ

イントになって、課題になるかということをお話しします。参加されていた方もかなりいらっしゃると思いますが、改めて確認していただければと思います。かなり込み入っていますので、何回も聞いてほしいと思います。データの結論や考察を聞くだけではなく、いろいろな施策、実践につなげていくことが大事ですので、そういったところを意識しながらお話しするのが前半のパートです。

（スライド3）後半は、高校・大学の接続課題はたくさんあるのですが「探究」はキーワードというか中核課題になっていると、この1年、考えております。ただ探究だけではなく「教養」です。ほとんどの高校の先生方は、教養という言葉で考えられていないと思いますが、大学から下ろして考えると、非常に教養的なのです。後ほど言いますが、大学教育の中で「教養教育」は尻すばみでありまして、どうしようかという状況ですが、全く違う角度から探究が大学につないでいっている。そのように見えておりますので、その根拠になるところをお話ししたいと思います。

（スライド4）まずは「10年トランジション調査」です。これは2013年に全国の約400校の高校、45,000人の高校生が参加して、約10年間を追いかけるという調査でした。6～7割以上の生徒が大学に進学する学校を抽出して、お願いして、ランダム抽出ではありませんが、全国の多くの学校にご協力いただいた。高校から大学のところでごそっと抜けたりしますの

で、河合塾の方々には大変頑張ってください、10年近くたって、最後は1,500人とかなり残りました。非常に大きなデータになっていると思います。

今日は、そこからお話するのですが、そもそも、なぜ、このような調査を行おうと思ったのかという前文脈は非常に大事です。それは、高大接続、トランジションが最初にあったわけではない。私は、大学教育の改善・改革を30年くらい行っているのですが、大学では、いわゆる教授がぼそぼそと古いノートを読み上げる講義で、一方通行といったところから、学生が学び成長する学習者本位や、荒瀬先生の言葉を借りれば「生徒を主語にする」という教育観が世界的に急速に進む中で、大学教育が変わってくる。こうした中で、データもいろいろと蓄積されて分かってきたのが、たとえば大学が学習者本位で、いろいろな改善・改革が進んだとしても、初期値が非常に重いということです。

大学に入ってきた1年生のときの状態が4年生を既定するというのは、経験的にも分かっていたし、限られたデータでしたが、GPAでも4年間、変わらず、動かない。さらに分析をすれば、大学1年生のときにGPAが低かった学生が上がっていったり、高かった学生が下がっていったり、山になったりすることが想定されたわけですが、そういった結果は出てこないのです。これは、いくら分析を行っても出てきません。それはGPAだけの話なのか。今日のテーマになっていて、私にとっても非常に大事なテーマですが、キャリア教育、キャリア意識というところを見ても、やはり大学1年生でよいと思えば、4年生でもよいのです。1年生のときに「厳しいな。なぜ、この学生は高校までに、ここをもう少し鍛えてもらわなかったのだろう」と思う学生は、そのまま行ってしまうケースが多い。こういったことをさらにデータで明らかにしたいというところから、調査を始めました。

2013年に始めていますが、その当時は、政府では審議があったのですが、世の中的にはまだ高大接続という言葉は一般化されていなくて、この後、合流していきます。高大接続を見据えて、この調査が始まったわけではなく、大学で学び育てるために、高校にきちんと接続してもらいたい。高校の先生方が「大学受験が一番大事」「いろいろ我慢しても、大学にとにかく入れ」「大学に入ったら好きなことをして」と言うことが駄目だという話を実証的に示すために、この調査を始めたわけです。たくさん我慢して大学生になっても、それまでにしてこなかったことは大学生になってもできない。大学でいろいろと育てようと思っても、学生自身にその意欲がないのです。そういうマインドセットは、高校までにしっかりと出来上がっていて、キャリア意識も大きいです。自分が成長しようと端から思っていない。そういう学生たちには、授業も、アクティブラーニングも、キャリアも何もないということが大学のいろいろなところで出てくるわけです。このようなところから、この調査が始まり、高大接続改革が合流し、現在に至る。こういうことを少し頭に入れておいてください。



10月1日に報告した資料をそのまま使いますが、今、本にまとめていまして、来年の春くらいに出てきますので、また皆さんにご案内したいと思います。今日は報告だけですが、聞いてください。

(スライド5) 大きく2点、ご紹介いたします。1つは、資質・能力のアセスメントの測定にはいろいろな方法があって、必ずこれが素晴らしいという方法ではないのですが、自己評定で幾つか項目を与えて、因子分析をしながら得点化していく。自己評定は駄目だとよく言いますが、そのようなことはなくて、非常に極端に付ける人は上にも下にもいますが、全体的には、やはり、自分の能力評定は心理・社会的なものですから、自己評定で行ってもおよその人は自分がどのくらいの位置なのか分かっているというのは、統計的に見るとよく分かります。例えば、河合塾のPROGテスト・学びみらいPASSで相関を取っても、点4や点5が出てきます。統計的な指標としては、それくらいでよいのではないですか。そういう意味で、中身は細かくお話ししませんが、資質・能力の「他者理解力」「計画実行力」「コミュニケーション・リーダーシップ力」「社会文化探究心」という4つの得点を取って、自分が前年にどのように答えたかは分からない形で、高校生、大学生、社会人と、毎年、とにかく、そのときに思う形で付けていく。そのように点数を取っていく。そして、潜在クラス成長分析という統計的な縦断研究プロセスを扱う手法を使っているのですが、統計的に解析すると、こういう結果になる。

なぜ、社会人で落ちているのかは分かりません。リアリティショックとも言われていますし、よい意味でも、悪い意味でも大学生までの肥大化した自己肯定感からの落ち込みともよく言われます。この調査からでは分かりませんが、ポイントになるのは、高クラス、中クラス、低クラスという非常に簡単な線、交差しないクラス、これしか抽出されないということです。これを3本ではなく5本にすることは可能です。間をもう少し取って、最適解を増やすことはできます。しかし、それは中の上が増えたり、中の下ができたりして、話が複雑になるだけで、

やはり、クロスはしないのです。後ほど、クロスするものもお見せしますが、この資質・能力の観点でいうと、想定を全て裏切ってくれた人は、それほど多くはなく、クラス移動するほどには大きく変化をせずに、年を経ていく。

これは後ほどまとめますが、人は変わらないから教育は要らないという話ではないのです。このグラフから読み取って、実践につなげることは2点ある。1つは人の発達とは生まれたときから、心理学的に言うところの胎児のときから、遺伝に影響を受けながら、そして小さいときから人や社会との相互作用の中で徐々に育って、蓄積されていくものですから、18歳や20歳になって、いきなりゼロベースで上がったたり下がったりするとおかしいです。逆に言えば、発達を踏まえれば、この結果は非常に妥当で、ここが複雑に重なるようであれば、人の発達とは何だという、大きな課題が出てきたところです。

もう一つは、これは社会人まで行い、縦の幅を狭めているので分かりにくいですが、大学生までのところで見ると少し上がっていたのです。こういう分析には傾きという指標があって、高校2年生から大学4年生までのグラフの右肩上がりの傾きが有意で出てくる。つまり、大きくはないが、得点は上がっていました。高群、中群は、全体の8割の人たちのサンプルになります。低群は少し落ちたり平行であったりするのですが、高群、中群の8割の人たちは得点が上がっていて、これも先行研究とかなり合致しています。私たちとは違うところで行っている、いろいろな指標・調査等で、大学1年生から4年生の資質・能力は全国平均では上がっていく。なぜ上がっているかは置いておいても、大学生は4年間でかなり成長するという研究知見があります。それにも合致しているので、なるほど。クラス移動するほど大きく変化はしないが、それぞれのクラスの中で得点が上がって、大学生は成長している。これは、後ほど発達と成長という言葉に分けてまとめているので、

今はここだけ聞いておいてください。

(スライド6)お見せしたい大きな結果の2つ目ですが、この数値を見てもなかなか難しいので、私の話を分かったところだけ聞いてください。この図の中に、パス解析で、同じ人の高校2年生、大学1年生、3年生、社会人3年目の4地点を取っています。実は、間も取っているのですが、あまり取り過ぎて分析を複雑にしても分かりにくいので、4地点に絞っています。変数も、さらにたくさん取っているのですが、学びと成長に資する学習キャリア変数はおよそ分かってきまして、10年前とは全く状況が違い、ずっと取ってはいるが、使うのはこの辺だけでよいかという知見の蓄積の上で、このパスモデルがつくられています。トランジションモデルと呼びます。

まず1つは、この扱った投入変数に、社会経済的地位、いわゆる社会階層と呼ばれるものは入ってきません。私たちのプロジェクトチームには社会学の人たちにも入ってもらい、親の学歴や年収をかなり見ました。あるいは、地方からの移動といったものが、このトランジションモデルには効いてこないの、外している。なぜ効いてこないかというのは、まだ考察が必要ですが、ただ、よく言われてきたのは、小学校や中学校のときの学力は社会階層が非常に大きく効いてきます。しかし、大学進学者層に絞っていくと、社会階層差が消えていくというのは、世界で報告があって、おそらく、日本でも。そこがプロジェクトの1つのポイントになるところだと言われています。

2つ目に、このように高校生からの時点を取って、一括で構造分析しているわけです。これは「組織社会化」という変数。特に初期キャリアです。就職して3年から5年くらいの社会人にとっていくアセスメントですが、職場に適應しているか。つまり与えられた課題にしっかり取り組み、職場の上司・同僚、あるいは営業など外の人たちとの関係をうまく行って、与えら

れた職務をきちんとこなしているかという社会適應です。その職場での社会適應を「組織社会化」と言いますが、こういう得点が1つ。それから「能力向上」です。これは、さらに年を取っていてもそうですが、自分が一歩でも二歩でも上を目指して頑張っていくような、能力向上得点。それから、先ほど、問題にした「資質能力」というように、大きく得点化しています。

この高校2年生のときのある状態がバシッと効いてくるという結果になっていけば、大学はあまり関係なく、高校の間でかなり決まりますという話になります。しかしながら、いろいろな分析を行っても効いてきません。実は、細い線でつながっているものがあって、全く効いていないことはないのですが、取り上げるほどの大きな影響は出てきません。どこから出てくるのかというと、ここで言う「AL外化」。つまり、アクティブラーニングをきちんと行えて、それが自分の手応えになる。ただしているのではなく、議論や発表を通して自分の勉強になっていたり、世界観が広がっていたりという得点が残ってくる。私たちは、ずっと高校生から大学生を見ていて、あるいは経験的に見ていて、もう少しキャリアが効いてくると思っていたのですが、これだけ変数を投入して、統制というのですが、互いの影響力を全て捨象して、何が残ってくるかという分析をすると、残ってきたのはアクティブラーニング。全く狙っていないのですが、そういう結果になっている。大学4年生も取っているのですが、ここでは大学3年生でモデル化していて、特に大学3年生のアクティブラーニングが効いてくるということです。

ただ、この社会人3年目に効いてくるのが、その手前の大学から仕事・社会への移行のところではあるのですが、こちらを見てもらうと、これはこれで線が通っていますよね。これは、どういうことを意味するかというと、高校2年

生のところで縦の線を引いています。そして、大学3年生のところでも縦の線を引いています。高校2年生から大学1年生への移行が、まず1つあるのです。ここで効く・効かないというのが、少し分かりにくいですが、特に「勉強タイプ」というのは、いわゆる進学校に多い生徒のタイプです。勉強もするし、クラブ活動もする。勉強タイプと付けているのは、家庭学習をかなりする生徒たちだからです。学びと成長で言えば、家庭学習をする・しないだけで高校生はかなり分かりやすく分かります。

「二つのライフ」と呼ばれるのは、キャリア意識です。二つのライフはフューチャーライフとプレゼントライフの組み合わせで、将来のことを思い描き、それを実現するために日々頑張るという、将来表象（時間表象）と日常のリアルな空間をつないでいく。これは、いろいろな意味でかなり効いてくる変数で、ただ将来のことを思えばよいかというと、そうではないですね。日常の生活・行動でも頑張らないといけません。主体的な学習や、もちろん、授業外学習時間にもかなり効いている。

そこから、もし大学3年生や社会人3年目に直接パスが通っていれば、高校生のときに家庭学習をし、クラブを両立し、自己肯定感が高く、行事なども中心で頑張っていた人が将来を決めるという話になるのですが、ならない。そのような結果は出てこない。つまり、高校生の間は、それは非常に大事で、大学1年生でつないでいくところでも、かなり効いている。しかし、大学に入ると、仕切り直して、これまでに培ってきたそういう態度や意識を持って、大学バージョンとして発展させていく。そのため、高校2年生から大学1年生のステージが1つ。大学生に入って1年生から2、3、4年生と進んでいく、大学生の期間で2つ。それから、大学から社会に大きく環境を変えて、大学までに培ってきた資質・能力や意識・態度をつなげて、社会人として頑張る3つ目のステージ。これらが、

それぞればらばらに組み合わせさせて、積み重ねで、人はトランジションしていくのです。

こういったものを学術的には間接効果と言います。つまり、先ほども言ったように、直接効果は出てこない。しかし、間接的にはつながっています。そのため、勉強タイプはこの「二つのライフ」や「主体的な学習態度」が、高校から大学にかなりつながりますが、つながった後、大学生を1から3年生につないでいくこの太いパスに入れています。ここに行くかどうかは分かりません。しかし、仕切り直して、つないでいけば、いろいろとつながっていく。ずっとつないでいけるとよいというのが、2つ目のお話です。

それから、3つ目は、大学1年生と3年生の間に太いパスがあります。やはり大学1年生から3年生にかけて、この変数はほとんど変わらないです。一番変わらないのは、この結果でいうと「主体的な学習態度」です。これは、例えば、このように聞いているときに、ただぼうっと聞いているのではなく、自分なりにメモを取ったり、考えたりしながら聞いているという主体的な課題への関わりや、あるいは、レポートを出すときでも、ただ字を埋めて出せばよいではなく、自分でいろいろ吟味して、頑張って書いたと言えるレポートを書こうとする。発表のときでも、ただ与えられたスライドを読み上げ、聞いている人の時間の無駄のような発表ではなく、みんなに聞いてもらいたいと思うようなものを、自分でいろいろブラッシュアップして、元気よく発表していく。そういった態度を取っています。これは尺度で「.56」です。このパス解析で「.56」という数字はなかなか出てこないくらい大きいです。あとは、成績で「.54」です。GPAが変化しないのも、ここできれいに表われています。

他方で、動かない話として、冒頭でも言いましたし、私もいろいろなところで言ってきたのですが、こうして分析してみると、1番上の「二

つのライフ」、キャリア意識として使っている変数ですが「.37」。つまり、変わりにくい、変わらないわけではないという考え方が、ここから出てきます。そのまま行ってしまう人が半分いるが、半分は動く。したがって、ここに教育の可能性はある。もう一つが「AL外化」です。先ほど、これが社会に効いてくると言いましたが、これも「.39」です。1年生のときにできているからといって、3年生でできるとは限らないですし、逆もしかりです。1年生のときにできていなくても、3年生でできるようになる人もいます。あとは「授業外学習時間」です。このようにして、変わりにくいと言われているものの中でも、変わりやすい部分が見えてきたのが、今回の最終成果の1つのポイントになります。

(スライド7) 先ほど、アクティブラーニングは変わりやすい、数字でいうと「.39」と言いましたが、どのような話かというと、大学4年生のときの調査報告書で使った図をそのまま持ってきていますが、このようなものです。つまり、アクティブラーニングの得点が、大学1年生、2年生、3年生、4年生とあって、先ほどの資質・能力の4つのところで見せた、潜在クラス成長分析で分析を行っています。どれくらいの最適解があるか。このように分析をすると、先ほどの資質・能力と違って、ずっと動かない高・中・低というクラスがやはり出てきます。横にパーセントを書いている、見えにくいと思うのですが、およそ70%から75%で高・中・低が成り立っています。つまり、70%の人は、アクティブラーニングといえども、そのまま行くということです。しかし、統計的に、低から高に上がっている人、低から中に上がっている人、もちろん落ちている人、この3つが出てきます。これで25%です。この辺りが、大学生の大きく変わっていくと言われる、可変性の部分。つまり、先ほどの「.39」ですが、変わりやすいと言われても、これくらいです。大学

生はなかなか変わらないというのは、1つ言えると思います。これは最後の私のまとめにつながってくところですが、やはり、義務教育をはじめ高校以前で、きちんと育て、リレーしていくことが大事になるということが最終成果で見えてきたと言えます。

(スライド8) よく受ける質問を3つ取り上げ、このトランジションプロジェクトの深掘りをしたいと思います。「大学の偏差値が高ければトランジションは成功するか?」。皆さんの資料では「No」と単純に書き過ぎてしまったので、少し直しました。「Yes&No」としておきます。「Yes&No」というのは「Yes」でもあり「No」でもあるが、基本的には「No」です。つまり、このトランジションモデルの右側の、先ほどから申し上げている「組織社会化」「能力向上」「資質能力」といった、いわゆる仕事をしていく社会人としての能力、態度に、大学の偏差値は統計的には効いてきません。どのように行っても、偏差値はあまり関係を持ちません。そのため、基本的には「No」です。ところが、先ほど言った、高校2年生のときの勉強タイプですが、家庭学習をして、クラブ活動もして、自己肯定感が高く、行事にも参加する、非常によい生徒たち、進学校に多い人たち、進学校に多い結果が、高校2年生で出ているのです。やはり学歴や受験偏差値などとの関係がありますので「Yes」を加えました。ただ、そこが良ければその後も続くというわけではないのは、先ほど言った、間接効果の話としてご理解いただいて「Yes」の部分は小さいということです。

(スライド9) 2つ目は、先ほどの荒瀬先生のお話の中で出てきた「キャリア意識」。私も、これはずっと非常に大事だと言ってきました。ただ、先ほどのモデルの中では、アクティブラーニング外化が最後にバシッと効いてきたが、キャリア意識の直接的な影響は、このモデルでは示されませんでした。どのように解釈したらいいのか。1つは、同じ学年の中で、ここに示

している5つの変数は、かなり相関が高いです。つまり、どれも違ったアスペクトを扱っていて、その中でどれかという「AL外化」が効いてはきたが、ほかは要らないのかという、そのようなことはなく、例えば「成績」。やはり成績は高いほうがよいです。与えられたものをしっかりこなしているという意味で、トランジションには効いてはこないかもしれないが、実は残り4つはかなり効いてくるのです。それらと同じように、キャリア意識というのは、同じ年度だけで見ていくと、この「二つのライフ」ではかなり効きます。先ほどの、高校2年生の勉強タイプも、大学生までかもしれないが、どのような大学に行ったらよいか、将来このようなことをしたいなど、将来の意識がかなり出てきます。つまり、キャリアと学習にはかなり相関はあるのです。これが1つ。つまり、AL外化が効いていたか、これだけでよいということではなく、いろいろなものが連関して人の学びや日常生活、大学生活は成り立っているということです。これが1つ。

もう一つは、このモデルは大学卒業後、社会人3年目までのいわゆる初期キャリアまでのトランジションモデルです。初期キャリアというのは、皆さん、ご存じのように、22歳から25歳くらいですから、職場に行って、与えられた課題を一生懸命こなし、職場の同僚・上司といろいろうまく仕事していきましょうという、いわゆる適応のプロセスです。そこでキャリア意識が効いてこないのも、分からなくはないです。むしろ、きちんとかなせて、人とやりとりし、議論ができるというように、アクティブラーニングが効いてくるのは妥当な結果とも言えます。しかし、20代後半、30代、40代と、いろいろなプロジェクトベースで、特に主任や課長にポジションが上がって、この会社は何のためにあるのか、この商品はお客さんにとってどういう意味があるのか、自分は何のために仕事をしているかなど、いろいろと考えることが非常に

に大事になる。大学生でも、自分はなぜ勉強しているか、将来何になりたいかがなければ、勉強しないですよ。勉強だけが大好きなんて、京都大学の学生でもそれほどいなかったです。やはり、将来のことがどこかにあって学んでいた。それはみんなが共通するわけです。このトランジションモデルの社会人の年齢をさらに上げていくと、キャリアの意味がさらに上がってくる。そして人生100年時代、このようなところまで行くと、非常に大事になると私は考えています。ここは考察です。

(スライド10) 3つ目の質問ですが、先ほどの図でも「高校生、大学生が発達的に仕上がっていても、教育しても仕方がない」と、必ず言われてきました。そのようなことはありません。クラス移動するほどには変わらないが、大学生の中では変わっていつていると言えます。先ほど、傾きの話をしましたので、この図だけからでもそれは言えます。

(スライド11) ただ、もう少し肉付けをするという意味で、皆さんにはこういうデータをお示しします。これは何かというと、別の調査ですが、大学3、4年生を対象に「あなたは、入学してから自分は成長したと思いますか」と直球で尋ねています。7割の人が多かれ、少なかれ、成長したと答えています。これでよいではないですか。

ここはもう少し理論的考察が必要で、今、示せるのはここまでなのですが、それでも10月1日よりアップデートしています。小さいときからの「発達」は成熟の問題です。人が大人になるという発達。これらは *matured* や *maturation* という言葉を使って「成熟的発達」を「*matured development*」と置いてみる。私たちが「成長」は何と呼ぶかというと、*growth* などがあるが、英語的には *development* なのです。*development* は「成長」と重なるので、*psychological* や *subjective* と付けてもよいのではないかと。つまり、大きなクラス移動

はしないが、自分が一步でも二歩でも上に向かって、主観的にできるようになってくる。ここでは「psychological」と書いていますが、最近「subjective」がよいと思っているのです。そのように理論的に考えなければならないというのは、今後の課題なのです。ただ、maturedではない発達の一般的な形は、ここに書いたように「生じること」「単純から複雑へ進歩すること」「あるテーマをつくりあげること」「開くこと」「より発展した状態に移行すること」。クラス移動を伴わないとしても、これらがあれば発達、成長と言えるという議論があるのです。それで十分ではないですか。私たちが年老いても、これがあれば成長しているという、十分通ってきます。今は、ここまでですが、こういうところまで来ているということです。

(スライド 12) 残りの時間で、探究が高大につないでいく中核的なところと私が申し上げた、その話をしたいと思います。

(スライド 13) まず、先ほど、荒瀬先生から、政府の施行、共通理解のお話がありましたが、そこがかなり絡んできます。ただ、私は「主体的・対話的で深い学び」とは書いていないので、高校の方はうまく翻訳しながら聞いてください。大学には、主体的・対話的で深い学びはありません。大学では、まだ「アクティブラーニング」を使っていますので、かっこしてアクティブラーニングでつなぐ。私はそれくらいでよいと思っています。

まず、アクティブラーニングがどういうところから出てきたかという、このような講義です。教師から生徒・学生への一方通行的な知識を伝達するようなものを乗り越える形で、学習者本位に。政府の言葉で言うと、学習者が「何を教えるか」「何ができるようになるか」、あるいは「何を学び、何ができるようになったか」。それを見ていきましょうというところから。講義一辺倒から学生の活動を通して、学生の認知プロセス。頭の中で何が働いて、それを外化し、

自分が学んだことを紙に書き出したり、他者に伝えたりする中で、自分の頭の中の学びをより構造化していく、あるいは、整理していく、次第に知識を追加していく。そこがアセスメントのポイントだということは、どのように言っても、いろいろな立場があっても、アクティブラーニングという言葉を使うときのポイントになります。

(スライド 14) ただ、アクティブラーニングは「学習パラダイム」と呼ばれる代表として、広く一般的に出てきた言葉です。「教授パラダイム」への対応は、意外と議論がずさんでして、私もそういう言い方をしてきたのですが、teaching から learning へ。あるいは政府の言葉で言うと、ここに書いてありますが「何を教えるか」よりも「何ができるようになるか」という、〇〇から〇〇への転換を言っています。先ほどの荒瀬先生のお話でもあったのですが、教えることも学ぶことも大事で、学校教育で教授パラダイムを否定すると終わってしまいますので、その理論的整理が必要だ。そういうときに、アメリカでジョン・タグという、学習パラダイムで有名な論者の先生が、後期の本の中で、これは私が書き直していますが、このような図を使って説明しているところがあります。つまり、学習パラダイムというのは、確かに、学習者中心の何を学んだかですが「教授パラダイムの枠」を踏まえて、そこを超えた空間に学生たち、子どもたちを移動させることだ。つまり、私たちは授業である以上、この枠のところで共通する学習目標を立てているわけです。これだけの知識は学ばせたい、これだけの態度や議論はみんな共通に到達させたい。これは学習目標ですので、そこは全員到達を目指す。しかし、リフレクションなど自分で書いたり、あるいは他者と議論したり、グループでいろいろ議論したりしていくと、生徒・学生の生活・経験世界が広がる、あるいはこれまでの既有知識、世界の疑問が出ます。教師が予定した話を軽く

超えていくものであって、私はそれが大事だと思います。自分の考えが出てくるくらい、この枠を超えるくらいのペアワーク、グループワーク、発表を、年間のどこかで時々入れていくことができればよい。そのようにできなければ、言葉遊びをしたいわけではないですので、アクティブラーニングや主体的・対話的な深い学びといっても仕方がないです。そういうところにタグ先生の1つの見方があって、さすがだと思っているわけです。つまり、教授パラダイムの枠を踏まえながら、学習パラダイムも発展させる。

(スライド 15) それを政府の図式で当てはめていくと、これも荒瀬先生が先ほど示されましたが「習得・活用・探究」。非常によくできた考え方だと私は思います。つまり「習得」は普通の教科で、どちらかというと教えることが多い、教科書中心の授業。それは、もちろん、教授パラダイムが多く割合を占めるが、多少の振り返りや、あるいはペアワーク、グループワークを少し入れて、2～3割の活動時間を入れていく学習パラダイムがある。「活用」は飛ばします。総合的な探究の時間を1つ念頭に置きますが「探究」でも、生徒が自分で課題を発見して、情報収集するだけではないですよ。課題のセットの仕方、問いの立て方、情報の集め方、分析の仕方はきちんと教えていますよね。そのため、多少は教授パラダイムがある。しかし、学習パラダイムのウエイトが大きい。このように考えれば、習得・活用・探究というのは、先ほど、荒瀬先生が全ての組み合わせをおっしゃっていて、すごいと思いましたが、くるくる回しながら、あるいは飛ばしてもよいのです。行ったり来たりしながら、学びの過程として総合的に捉えていくものである。これがゆとり教育を脱却して、現在、基礎・基本をしっかりと踏まえながらも、生徒の共通知識を基盤にしながらも、個性化を目指していく1つのポイントになっている。

それは、伝統芸能の「守破離」という考え方にも共通していて、本当に、いろいろなところの考えがここに集約してくる。例えば、伝統芸能も能や歌舞伎をイメージしてもらうとよいと思いますが、やはり、現代に合わせた個性的な舞台や劇をつくっていかないといけないです。しかし、何百年の歴史や先達がつくってきたいろいろな技芸がありますので、それをしっかりと学んでいくことが「守」の部分です。基礎・基本の部分は、非常に大事。しかし、これだけのいろいろなエンターテインメントにあふれた私たちの現代社会において、それだけをしていても、能や歌舞伎を見ても面白いとは言わないですよ。それを面白いと思うためには、いろいろな知識や勉強が必要だ。プロの人たちもそれを学んで、そして、それを破って、離れていく。この守破離というのは、まさに習得・活用・探究と全く同じダイナミズムがあると私は思っています。



(スライド 16) ここは大事だと思って入っていたので、一言だけ。人の発達から見ると「時間」と「空間」、特に空間から人の発達は始まっていくのです。最初は、お母さん、養育者との関係をつくって、地域やいろいろな友達、知らない人、社会、共同体に広まっていく。そのように生活空間や社会空間を広げていく形で、人の発達はあります。教材もそうですよね。小学生の最初は身近な世界から始まって、徐々に地理的に遠いところに行く。時間的にも、まず

は現在のいろいろな事々を学んでいくわけですが、小学生の終わりになると歴史や古文、地理など。中学生になると、私たちが行ったことがない海外の国のいろいろな状況が出てくる。このように、教材というのは、あるいは教育や人の生活空間、時間というのは、いろいろな形で広がっていくようにデザインされています。発達のにも言えるし、教育もそれに対応させて構造化されている。

ところが、人は小学生の終わりくらいから中学生くらいから自我が芽生えてきて、与えられたように空間を広げたり時間を延ばしたりしなくなります。それは小学生の終わりくらいまで、あとは自分が分かればどんどんそのようにするし、分からなければ、今のこの世界で十分で、好奇心がないから新しい人と出会う必要もないなど、拒絶していくわけです。私たちが探究や個性というときに、やはり、社会生活や社会空間をさらに広げてくれないと個性は出ないです。今の友達で十分だといえ、新しい人とつながろうともしないし、新しい知識も学ぼうとしない。将来のことに興味を持たせたいが、社会に関心を持たない生徒・学生が、将来のことを考えるはずがない。こういう空間と時間というのは非常に密接に関連していて、学術的には時間と空間はそれほど対応がないのですが、実践的にはこの2つは非常に関係がある。そのため、将来のことを考えさせたいのであれば、社会のことをいろいろと学ばせる。社会のことを学ばせながら、自分がどういう大人になりたいのか、どういう社会人として生きていきたいのかを考える。これが時間と空間の拡張なのです。

(スライド 17) データで見ても、時間と空間の弱い人は、社会でも非常に弱い。

(スライド 18) あまり説明しませんが、右の点数の低い人たちは、時間・空間が弱い人と思ってください。しかし、こつこつと真面目に行う人もいます。先生たちが与えた課題を一

生懸命こつこつと行って「頑張って大学に行きます。でも、将来のことは分かりません」という人は、この右の2つです。学力、偏差値は関係ありません。人の発達を考えたときの得点です。

(スライド 19) 最後です。冒頭で申し上げましたが、探究というのは時間・空間の拡張を目指していく。つまり、社会での、あるいは自然や人など何でもよいが、自分が疑問だと思う世の中の問題を課題として設定し、どうにかしてその根拠を得て、情報収集をする。こういう話ではないですか。時間・空間の話をたくさん行っているわけです。探究や総合学習は、学校教育の流れの中で出てきたと思うかもしれないが、そのように考えるのは、実は、大学では「教養教育」と言っていたものなのです。かつての大学と違って、今の一般的な大学では、ほぼ専門の先生が下りてきて、ミニ専門をしているだけで、知識として一般性はあるかもしれないが、その知識を通して、あなたはどのような大人になりたいか、社会でどういうことを考えていきたいかというところまでなかなか行かない現実があります。

吉田文先生は、早稲田大学の教授で、おそらく、この日本で、一般教育あるいは教養教育を最もよく見ている先生の一人です。私はYouTubeのチャンネルを持っていて、いろいろなトップの専門家たちにインタビューをして、皆さんに配信しています。QRコードがありますから、良かったら見ていただければと思います。大学の話は出てくるが、大学以外の話は出てこないのです。そのため、吉田先生が見ていないのは、確認しました。吉田先生が見ていないということは、大学のほとんどの人が見ていません。最近、ミニ専門はいろいろあるが、社会について考えさせない。昔の先生は、下手な講義だったかもしれないが、よく社会について考えさせることがありました。今の先生たちは、学問にしか関心がありませんので、一般の

学術知しか教えていない。

大学は、それではいけないと思って、大学1年生や2年生の前半期にプロジェクト学習やサービスマーケティング、キャリア教育という名の下に、学生たちが調べて行うことを少しは入れています。しかし、私は、高校のほうがすごいと思いますよ。これは、高校の探究や行事を通した探究活動とほぼ同じ。今、大学でしようとしていることを、高校でしているではないかと思ったのです。

(スライド 20) 教養として足りないところが1つあると思っていたところに、皆さんも小論文の指導でよく知っているかもしれないが、学研の大堀精一さんからこの本が送られてきたのです。大堀さんが、漫画でもう少し高校生の小論文指導をしたいと思い、つくられたのですが、読み始めると、小論文の書き方の話はほとんど書いていなくて、小論文を読んで出てくる、社会格差やAI、医療、福祉、エネルギー、環境など、世の中にいろいろある小論文テーマ、課題テーマについて、これくらいは知っておかないと、幾ら文章を与えて、自分の考えを述べなさいと言われても書けるわけがないという前提で、11章あるのです。そのようなテーマ別に知っておかないといけない知識を網羅して、漫画で描いている。皆さん、だまされたと思って、これを読んでみてください。私は、最初、漫画だと思って気を抜いて読んでいたのですが、非常に難しいですよ。分かりやすいのは、AIやデジタルなどを議論するときに、GAF Aも知らないものを言えるのか、GAF Aがあるのだよという話が出てくるわけです。

そのときに、思ったのです。それは、本当は大学が教養教育の時間で教えていたことではないのか。それは網羅的ではないので、つまみ食い程度。小論文の受験は高校生全員がするわけではないですが、20年以上の歴史があって、教科にはなっていないが、皆さん、小論文はもう高校生に入り込んでいますよね。その1年間

の指導のところで、どこか探究の時間を使って、必要なところだけでも読ませて、覚えさせればよい。もう大学の教養は要らないと思いますよ。つまり、知識を大事にしている。小論文の書き方には、もう一つ『小論文 書き方と考え方』という彼の本があるので、それも読んでみるとよいと思います。これは知識の話です。高校生に、多少なりとも知識も大事という話でもって探究の話をしていけば、これは立派な教養教育で、大学をさらに短くして、早く社会に出したほうがよいです。今の大学では駄目だと、ずっと思っているのですが、高校は、頑張っているのではないかと。そういうところで高大接続を考えていくのが、私の最近の仕事です。

(スライド 21) これは、紹介だけです。YouTubeをいろいろ見てほしいと思います。こういう場で、専門家が基調講演で話をする外のイベントがあるではないですか。しかし、皆さん、いつも参加できるわけではない。こういうところに来ない一般の先生たちにも伝えたいと思い、インタビューをたくさんして、それをYouTubeで20分くらいにまとめて、あとは本を読んでくださいと言っています。ぜひ、利用してください。私の社会ボランティアです。

これまでは、高校までは完成教育と言っていたのです。小学校、中学校の義務教育があって、義務教育や中等教育の位置付けは、ヨーロッパ、日本、アメリカで違いますが、中等教育段階は、中学・高校をセットとして、高校が終わる18歳くらいまでの年齢が、人の社会的な基礎として、基礎的な知識、技能、態度を学んでいく、身に付けていくのに必要な期間。それを近代社会の完成教育機関と言っている。そのため、ヨーロッパでは、18歳までが最も大事で、そこから先はまさに言葉どおり、高等教育、Higher Educationです。Higherですから上はない、より高いだけです。そういう言葉遣いがヨーロッパにある。安彦忠彦先生とは、日本は、高校くらいまでを完成教育といい、基礎・基本を伝え

ると議論してきたのですが、安彦先生は、この10年くらいの間に考えが徐々に変わってきた。義務教育は義務教育で、先ほど、荒瀬先生が言った「社会に出ていく基礎を学ぶ期間」として、共通の基盤をしっかりと与えていく期間だと。高校は、中等教育の後半期だが、安彦先生は、中等教育以降は「私教育」でよいという言い方をされているのです。私教育とは何かを説明する時間はありませんので、申し訳ありませんが、本を読んでください。

しかし、1つ言えるのは、今、教育のデジタル化は、GIGAスクールなどのかわいいレベルではないです。学習コンテンツが急速にデジタルを通し、世界や日本のトップの大学からたくさん出てきて、いつでもそれを見られる状況になっている。大学に行って、専門の最先端の知識を学べるというのは嘘です。学部教育で専門の知識を教えられないというのは、私が京都大学にいたときでもずっと言っていた。そういう大学ではもはやないのです。大学院で狭い知識を教えることはできるが、学部生に専門の最先端を教える時間はないのです。それをどこで教えているかというと、オンラインです。そこが一番多い。そして、本当の最先端も出てくる。学びたい人は外に行けば、もっと学べる。そして、こういう外の間もさらに充実しているのが現代社会です。そのようになってきたときに、大学は学生たちに一体何を伝えていくのか。このような中で、高大接続、探究、教養などの問題があるとう理解ください。

今日は、どうもありがとうございました。

2

本日の内容

- ① 高校・大学・仕事・社会を繋ぐ10年トランジション調査の結果から
- ② 高大を接続する探究的な学習—日本型「教養教育」の色彩を帯びて

 TOIN GAKUEN

2

4

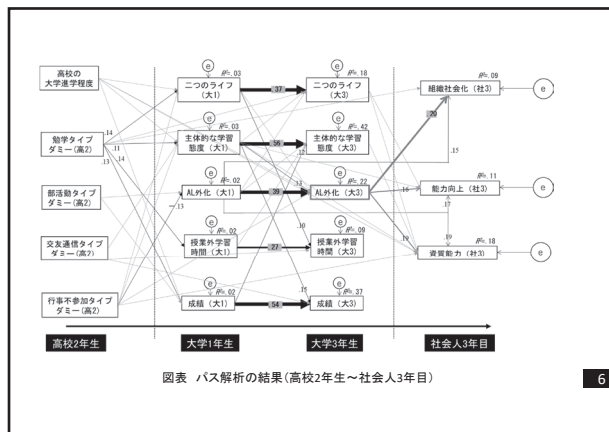
- ・ 2013年時 約400校、45,000人の高校生が参加
- ・ 2018年時 (大学4年生) 2,742名
(男性996名、女性1,731名) が継続的に調査参加
- ・ 2021年時 (社会人3年) 1,486人名
 - ・ (男性442名、女性1,037名) が最終調査に参加

湯上慎一(責任編集) 京都大学高等教育研究開発推進センター・研究企画(編) (2015). **どんな高校生が大学に進学したのか**
 高等教育研究開発推進センター・研究企画(編) (2015). **どんな高校生が大学で成長するの? 「学校」と社会をつなぐ調査** からわかった伸びる高校生のタイプ 学事出版

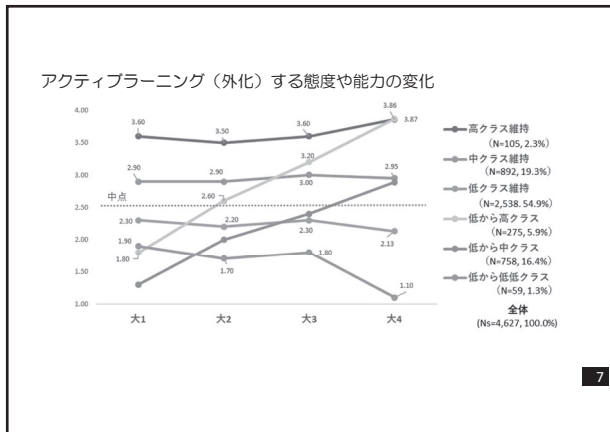
湯上慎一監修 京都大学高等教育研究開発推進センター・湯合盛(編) (2018年2月)
 『高大学徒の本質―学校と社会をつなぐ調査』から見たてきた課題 学事出版

河合塾グループサイト「学校と社会をつなぐ調査」 | 教育研究開発活動 1. p191-所収
https://www.kawaijuku.jp/jr/research/sch/pdf/2019_TransitionReport14.pdf

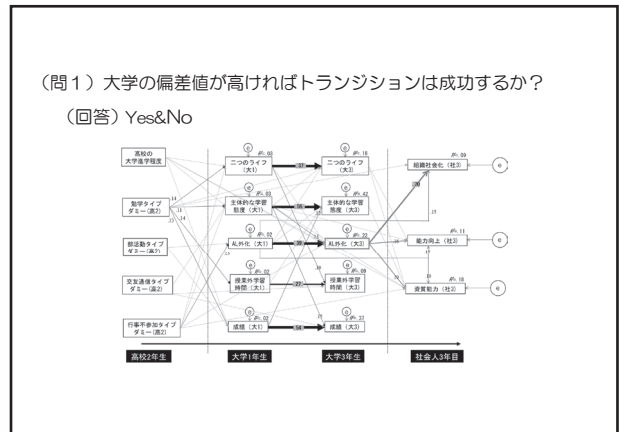
1



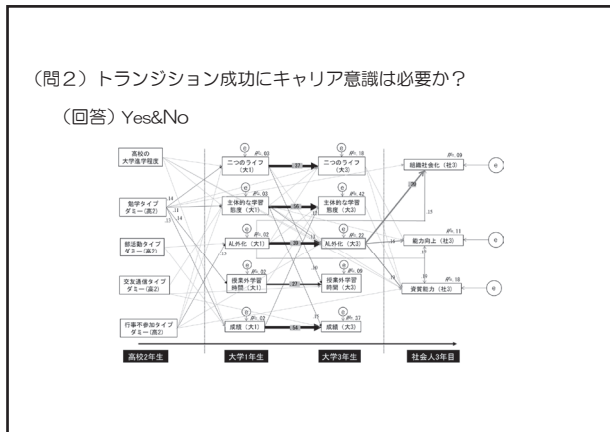
スライド7



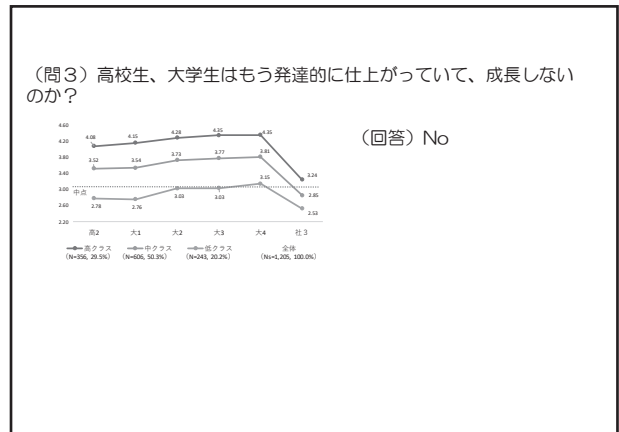
スライド8



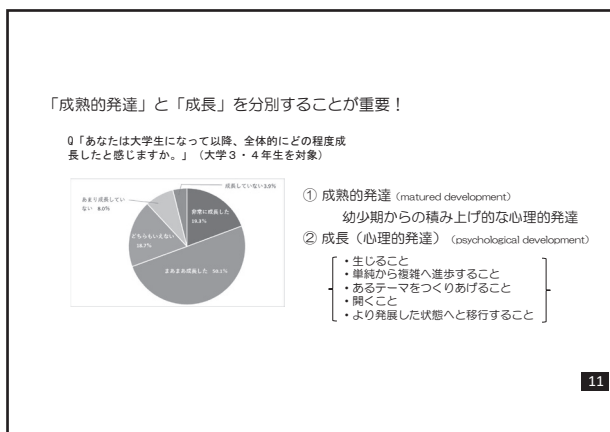
スライド9



スライド10



スライド11



スライド12

本日の内容

- ① 高校・大学・仕事・社会を繋ぐ10年トランジション調査の結果から
- ② 高大を接続する探究的な学習—日本型「教養教育」の色彩を帯びて

TOIN GAKUEN

12

スライド 13

アクティブラーニング型授業
 講義+アクティブラーニング（書く・話す・発表する等の「外化」）

大学 + 中学・高校

Readings 清上慎一の教育論 <http://seizok.net/education/>
 ・（理論）「大学教育におけるアクティブラーニングとは」
 ・（理論）「初等中等教育における主体的・対話的で深い学び—アクティブ・ラーニングの視点」

13

スライド 14

教授パラダイムから学習パラダイムへの転換

学習パラダイム

政府の施策との関連

○ 学士課程答申（2008年）、平成28年答申（学習指導要領改訂）（2016年）
 「何を教えるか」よりも
 「何ができるようになるか」

○ [高等教育] グランドデザイン答申（2018年）
 「何を教えたか」から
 「何を学び、身に付けることができるのか」への転換

Readings 清上慎一（2020）社会に生きる個性—自己と他者・協働的パーソナリティ・エージェンシー— 東信堂

14

スライド 15

教授学習パラダイムと習得・活用・探究
 （2008年学習指導要領）

探究プロセス
 ①課題の設定
 ②情報の収集
 ③整理・分析
 ④まとめ・表現

伝統芸能の「守破離」に相当

Readings 清上慎一の教育論 <http://seizok.net/education/>
 ・（理論）教授パラダイムから学習パラダイムへ
 ・（用語集）習得・活用・探究

15

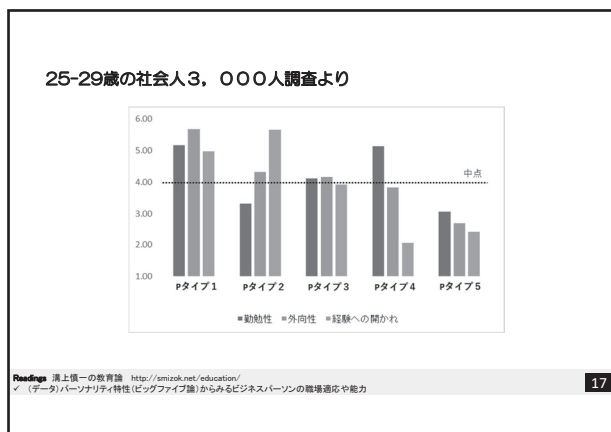
スライド 16

時空間の拡張を「資質・能力」「探究」の育成と捉える見方もあるといい

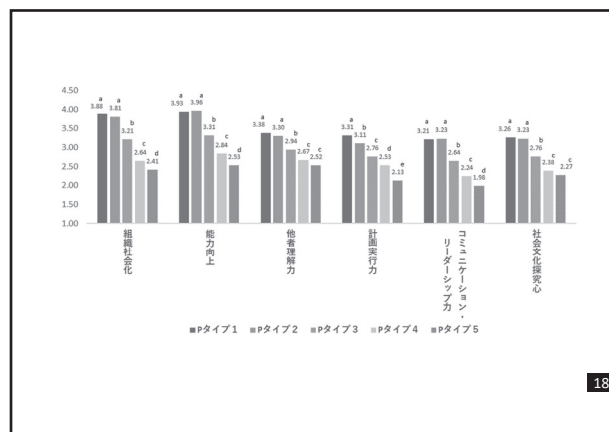
人の発達・成長の原理

16

スライド 17



スライド 18



スライド 19

No29

#1 日本の大学における
★ **教養教育・一般教育の歴史**
—吉田文先生(早稲田大学教授)にインタビュー—

これからの日本では、教養教育が大学、高大接続ゾーンで見直されていく。そのために知っておくべき知識!




スライド 20

No17(新著の企画)

#5 大堀精一監修
『マンガでわかる! 小論文 頻出テーマ編』

「知識がなければ自分の考えは書けない!」
という主張は、小論文だけのことではないはず!




スライド 21

No18

★ **「公教育」と「私教育」の観点から
学校を問い直す**
—安彦忠彦先生(名古屋大学名誉教授)にインタビュー—

高校、大学は生涯学習機関として考えられないか!それを説明する概念が「公教育」に対する「私教育」である




スライド 22

ご清聴有り難うございました

① 高校・大学・仕事・社会を繋ぐ10年トランジション調査の結果から
② 高大を接続する探究的な学習—日本型「教養教育」の色彩を帯びて

TOHIN GAKUEN

22

スライド 23

プロフィール

学校法人桐蔭学園 理事長
桐蔭横浜大学 教授

1970年生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学助手、2000年講師、2003年京都大学准教授、2014年教授を経て、2019年学校法人桐蔭学園理事長。桐蔭横浜大学学長(2020-2021)。京都大学博士(教育学)

日本青年心理学会理事、大学教育学会理事、"Journal of Adolescence" Editorial Board委員、文部科学省高等教育局スキームD(座長)、中央教育審議会初等中等教育局臨時委員、総合教育政策局リカレント教育審議会委員、大学・高校の外部評価・指導委員など。日本青年心理学会学会賞受賞。

専門は、青年・発達心理学・教育実践研究(自己・アイデンティティ形成、自己の分極化、学びと成長、アクティブラーニング、学校から仕事・社会へのトランジション、人生100年時代のキャリア形成など)。著書に『自己形成の心理学—他者の森を駆け抜けて自己になる』(2008世界思想社、単著)、『現代青年期の心理学—選応から自己形成の時代へ』(2010有斐閣選書、単著)、『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』(2014東信堂、単著)、『アクティブラーニング型授業の基本形と生徒の身体性』(2018東信堂、単著)、『学習とパーソナリティ—あの子はおとなしいけど成績はいいんですよね!』をどう見るか—』(2018東信堂、単著)、『社会に生きる個性—自己と他者・拡張的パーソナリティ・エージェンシー—』(2020東信堂、単著)、『高校生の学びと成長に向けた「大学選び」—偏差値もうまく利用する—』(2021東信堂、単著)など多数。

<http://smizok.net/>



スライド 24

最近の著作紹介

溝上慎一(2021)、高校生の学びと成長に向けた「大学選び」
—偏差値もうまく利用する— 東信堂

第1部 自身の「大学選び」の質を高める5つのポイント
第1章 Point1 将来の見通しを持つ
第2章 Point2 「大学で何を学びたいか」からではなく、「将来どのような職業に就きたいか」から「学部選び」を行う
第3章 Point3 大学がアクティブラーニング型授業を積極的に推進しているかを知る
第4章 Point4 偏差値をうまく利用する
第5章 Point5 三大都市圏以外の大学を選択肢に含める
第6章 (おまけ) 中小企業は面白い!
——ここから職業、「大学選び」を考えてみる

第2部 高校生からの質問に答える

高校生の学びと成長に向けた「大学選び」
溝上 慎一
偏差値もうまく利用する

